
ゴッドゲーム

佐久間遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッドゲーム

【Nコード】

N6454P

【作者名】

佐久間遊

【あらすじ】

桜が満開の頃、とある田舎にたっている、私立市ノ宮高校第2学年の教室。

生徒たちの机には、真四角の何の変哲もない紙切れが置かれていた。

.....
神様のお告げです。

.....
神の命令には必ず従いなさい。

命令に背いた場合は、死を与える。

全員強制参加である。

男子11番 中村慶人

女子3番 江藤宏美

に告白せよ。

期限は午前0時とする。

- - - - -

僕たちは、悪戯だと思ったんだ。

そして、実行した。

でも、それは違ったんだ。

僕たちは死への自爆スイッチを押してしまった

出席番号

男子

1番 赤田 豪

2番 井上 信士

3番 岡田 弘行

4番 加藤 空

5番 神内 久信

6番 木内 翔馬

7番 桜井 登

8番 高木 優太

9番 ダニエル・シルバー

10番 徳田 遊兵

11番 中村 慶人

12番 緋色 春平

13番 古田 浩介

14番 横井 涼

15番 ? ? ?

女子

1番 赤坂 優美

2番 宇田 咲

3番 江藤 宏美

4番 草野 美愛

5番 久野 百合

6番 坂田 舞

7番 滝 瑞希

8番 手瀬 瑞希

9番 鳥井 可奈

1 0 番	仁内	実花
1 1 番	沼部	桜
1 2 番	原口	瞳
1 3 番	目黒	優希
1 4 番	雪野	桐子
1 5 番	渡辺	美穂

第一章：終わりの始まり

カツカツカツと、教師が黒板にチヨークで文字を刻む音が教室に響き渡る。

木内翔馬は、黒板に見向きもせずに、何処までも晴れ渡っている空を、窓越しに見つめていた。

手は、もう既に癖になっているペン回しを自然にしている。

「よし、じゃあ木内。この問題、解いてみる」

教師に当てられ、空を見つめていた翔馬の眼が黒板の書かれている数式へと移動する。なにやら、意味不明な暗号が書かれているのを見て、自分のノートに視線を移す。

そこは、何も書かれていない、白が広がっていた。

全く意味がわからず、視線を彷徨わせて曖昧な笑みを浮かべ、場を取り繕う。

「..... a < 2 2 or a > - 2 2」

自分の席の後ろから静かな声で恐らく、この問題の答えと思われるものが聞こえてきた。

僕は、九官鳥のようにそれをそのまま繰り返す。

「 a < 2 2 or a > - 2 2です」

「おつ。良く分かったな。だが、授業はしっかり聞いて置けよー」
.....
バシていた。

「はい。すいません」

そう答えると、教師はそれ以上は何も言わずに、また黒板に数式を書き始めた。

僕は、安堵の溜息をつく。

そして、ノートの端を切りとり、『サンキュー』とだけ書き、後ろの席に置いた。

教師が黒板を書き終え、また生徒を当てようとしたところで、授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

「よし。じゃあ、今日はここまでにするから、残りの問題は各自で解いて来い。以上」

そう告げると、前列に座っている女子が立ち上がり、

「起立。礼」

『ありがとうございます！』

と、恒例の終わりの挨拶をする。

「つつつああく。疲れたあく」

翔馬は気だるげに机に突っ伏し腕を伸ばす。

「疲れたくってお前、特に何もしてないだろ」

翔馬の後ろからツッコミが入った。

その声に、翔馬は反応して、後ろを向く。

「おう、優太。さっきはありがとなー」

「ああ、いいっていいって」

「マジ、助かったよ。あの先生、答えられないとすぐ不機嫌になるからさー」

「それ分かる！」

と、更に会話に加わる人物がいた。

「本当に、翔馬はいつも授業聞かないんだから。いつまでも高木君に頼ってちゃ駄目だよ？」

「美穂だって、そんなに授業真面目に受けてないだろ？」

自分への注意を軽く逸らす。

「いやいや、渡辺はお前よりもずっと優等生だよ」と、優太が美穂を庇護する。

「うわっ。ひでえ〜、俺の事も何か言ってくれよー」

「お前は、これ以上のフォローのしようがないんだよ」

「そういうこと」

「ショック！」

そんな会話で僕たちは毎日をのんびりと過ごしていた。

終わりの始まり(2)

「ん……くう……」

ベッドから体を起こし、目を擦る。

「寝ちやつたのか……?」

ベッドの脇に置いてある、目覚ましを見ると、午前6時00分を指し示していた。普段、学校に行く為に家を出るのは、大体7時30分なので、まだ1時間半もの時間があった。

どうやら、7時にセットした目覚ましは鳴る前に自然に起きてしまったらしい。

翔馬はボーツとする意識のなか、自室を出て1階のリビングルームへと向かった。

ガランとした、空間。

翔馬以外の人間はいなかった。

両親は海外出張の為に、1週間ほど前から家を出ている。恐らく、帰ってくるまでにはまだまだ時間がかかるであろう。

その間、翔馬は全ての家事を自分でしなければならぬ。

両親曰く、『一人暮らしの練習』だそう。

適当に作った朝ご飯を、黙々と食べ、制服に着替える。

壁にかけてある時計を見ると、6時45分となっていた。

「ちよつと早いけど……行くか」

翔馬は、昨日の内に揃えて置いた鞆を手に持ち、家の外へと出た。

空はまだ少し、霞んでいた。

ひんやりとした空気が、翔馬の鼻から全体へと巡る。

「ん？ あれって……」

翔馬の眼前には、自分と同じ制服姿の生徒が見えた。

「優太……？」

「おお、翔馬か」

思ったとおり、前を歩いていたのは優太だった。

「随分と早いな」

「お前こそ、どうしたんだ？ こんな朝早くに。俺は、なんかわかんねえけど、早めに目が覚めちゃってさあ……」

そういうと、優太は眠たそうに大きく欠伸をした。

「優太もか」

「と、いうとお前も？」

「そうなんだよなあ。いつもはこんなに朝早くに、それも目覚まし無しで自分から起きることなんか滅多にないんだけどなあ……」

翔馬と、優太はいつも、学校の遅刻の常連組みだった。

むしろ、遅刻しない日のほうが珍しいほどに。

そして、その原因は美穂を含めた3人でのメールのやりとりであった。

翔馬達の学校は、家から歩いて10分程にある、小さな学校であった。

この地域に住んでいる高校生のほとんどはこの学校の生徒である。

学校の門は既に開いていたが、他の生徒達の姿は無く、唯一、職員室だけは教師たちがパソコンに向かって真剣な表情をしていた。

「なんか、いつもの学校じゃないように見えるよなあ……」

「まあ、僕たちがこんなに早く来るなんてもう珍しすぎて霰が降るからねえ。でも、いつもの学校なんだけど」

そういうと、二人で顔を見合わせ、苦笑する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6454p/>

ゴッドゲーム

2011年1月13日05時56分発行